

昨秋のある日、初対面の数人をふくむ計13人で、富士山宝永火口に行くことになった。しかし天候が悪く、半ばあきらめぎみの消極的な足どりで出発した。

ところが、4合目を過ぎたあたりで、わたしたちの車は厚い雨雲をつき抜けたらしく、なんとそこは快晴の別天地。すでに昼食時間だったが、天候がいつまで持続するかわからないので、全員一致で腹を背に換え、降車後すぐに身支度をして歩きはじめた。

森をぬけ、とつぜん目の前にひろがる宝永火口は、何度訪れても雄大で、だれもがしばし言葉を失う。東アフリカ地溝帯を肉眼で見たことはないが、宝永火口のスケールと色は、おそらくそれに近いのではないかと思う。

一行のひとり、堀内俊二さんという男性が、火口が大きすぎてカメラのレンズにおさまらないと言い、そわそわした。後になって知ったのだが、堀内さんは油絵を描かれる方なのに、その日スケッチブックを持参してこなかった。仲間うちにきいてまわったが、カメラはともかく、スケッチブックを持参した者はいない。

堀内さんは、あきらめなかった。だれかのリュックから新聞紙をもらい、それをひろげて、夢中でスケッチをりはじめた。たしかに、ひろげた新聞紙には、火口のはじからはじまでが収まるはずだろう。堀内さんは脇目もふらず、まるで一目ぼれした女性をはなすものかと、必死に追いかけるように鉛筆をはしらせていた。

わたしは、その一途なすがたに見とれてしまい、人が絵を描く原点を見た！ と思った。

今年の堀内さんの年賀状には、あのときの宝永火口の絵が、葉書の横幅15センチにうまく収まって描かれていた。なんだか、苦勞して射止めた彼女を、あらためて紹介されたような気がした。